



半世紀の大学生活を 終えるにあたり

岩 田 礼

私は1971年4月に大学に入り、来たる2022年3月で大学を去ります。学部は東京外国語大学で4年、大学院は東京大学で5年半（南京大学での1年を含む）、その後就職し、熊本大学で5年半、静岡大学で13年、愛知県立大学で4年、金沢大学で15年、そして公立小松大学の4年を加えて、通算51年間大学という環境にいたことになります。この間の経歴には断絶がなく、かつ私は採用試験（面接）というものを受けたことがありません。きわめて幸運な人生だったと思います。半面、世間知らずであることは否定しません。

しかし、私はこの半世紀、人がやらないことに膨大な時間とエネルギーを使ってきました。その原点は、二十歳の時、それまで4年間中断していた大学祭を復活させたことです。私の母校は大学紛争の重症校で、入学式、卒業式、そして大学祭等、いわゆる“正常化”とみなされるものは一部の学生によってことごとく暴力的につぶされていました。私達は無党派の小グループで、当時流行の“思想性”とは関係なく、「やりたいからやる」と主張しました。組織も経験もなく、古金庫に保管されていた過去の文書に拠りながらゼロからスタートしました。実行委員会発足から二か月の準備期間で開催にこぎつけたのは僥倖が重なった奇跡とも思われましたが、殺伐としたキャンパスの中でつらい思い出も多々ありました。

その後、31歳の時に熊本大学教職員組合の書記長、51歳の時に日本中国語学会の理事長（現会長）となり、それぞれ人から評価される成果をあげました。しかし、いずれも組織という後ろ盾があったため、どれだけ時間とエネルギーを使ってもさほど苦になりませんでした。本当に苦しかったのは、50歳の時に愛知県立大学で開催したIACLという国際会議の時で、劉先生が本誌に寄稿された文章でも言及されています。たかが学術会議と思われるかもしれませんが、資金、人手、宿泊施設等、すべてゼロからのスタートで、準備に3年の時間を要しました。この時持ちこたえられたのは、二十歳の体験があったからだと思っています。「できない理由を探す前にできるようにするための方策を考える」。結果、トヨタ自動車から宿泊施設の提供を受けることができました。「一人でもやり遂げる気概をもつ」、「しかし、人は一人ではなにもできない」ことを痛感しました。結果、全国の研究者から支援を受けたほか、多くの学生、特に夜間主コース在籍の社会

人学生、さらに地域の人々にも助けられました。ある人の手柄の陰にそれを支えた人々がいることを忘れてはなりません。

そして、大学生生活の最後に、公立小松大学と国際文化交流学部の創設に関与する機会が与えられました。無論、ここでは組織の骨組みが存在し、私の貢献は主にカリキュラム編成と教員配置に限られましたが、多くの方のお力を得て自由な構想ができたことに感謝しています。

開学してからは学生が私の力の源泉となりました。小松の学生は実に素直です。おそらくこれまで勤務した大学の中で最も素直な学生達だったと思います。正直、開学の頃は、入学者の1割くらいが中途退学するかもしれないと心配していました。新設大学で中国語を英語で教えるという実験めいた試みを実践したためです。幸いそれは杞憂に終わりました。中国語だけでなく、他の授業、例えば地域実習、インターンシップ、そして就職活動に至るまで、学生は実によく健闘しました。半世紀にわたる大学生生活の最後をこんないい子たちと過ごすことができるとても幸せでした。

私はニコチン依存症です。学生からも「くさい、くさい」と言われ続けてきました。しかし、それは刺激依存症の一つの表れだと自覚しています。実は学生との付き合いも同じことで、私はいつも一人一人の個性から刺激をもらっています。それはたぶん教員という職種に共通するものなのでしょうが、上述の“戦歴”を見れば、私の刺激依存症が肥大化したプロセスをご理解いただけたと思います。それらを“雑用”という言葉で括れば、雑用が研究の邪魔だと感じたことはありません。

しかし、それでも私は根っからの研究者だと自負しています。なぜなら研究は発見の喜びを伴う刺激だからです。方言調査データや音声実験で得られたデータを整理することはそれ自体単純かつ忍耐力を要する作業ですが、その先に発見を期待することができます。ところが、この刺激依存症の欠点は、興味の対象がしばしば変わってしまうことで、これは未だ博士学位論文を書いていないという誠に格好の悪い結果をもたらしました。

これらすべての刺激から解放されようとしている現在、私はどちらに向かって歩いていけばよいのでしょうか？ 因って人のことにかまっている余裕はありません。親愛なる同僚諸氏のご健闘をお祈りするのみです。